

## ゴルフ友達（その一）

赤谷慶子

ゴルフは三十歳になりし頃に始めたり。大手新聞社に入社後、先輩に誘はるる事多くなりたれば、一年間コースには一切出でず、毎日曜日にレッスンプロの指導の下、猛練習したりき。腕力ある男性に比し女性は飛距離出でぬ故、せめて同組の先輩に迷惑をかくる事を恐るれば、この練習は必須なりき。練習の成果故か、比較的飛距離は出でたれば、努力をしたる甲斐ありと言ふべし。先輩に誘はるるゴルフ場はおほかた名門にて、當時高給を食はむと雖も尋常ならぬ散財にてぞありける。保土ヶ谷、相模、霞が關、東京俱樂部等、料金も高額なり。往時はゴルフを嗜む女性少なかりしがゆゑか、誘はるる事増えたり。

何歳か年上の女流辯護士の友人とは年ごろの付き合ひにて、旅行仲間にもありき。シンガポール、マレーシア、伊太利亞、越南、臺灣、加奈陀・米國等を旅せり。岡崎久彦大使に誘はれ氣功教室に入りしが一九九六年と記憶せり。その女流辯護士先生の舊知の友人のY 辯護士先生は氣功道場に入りたしと依頼したるも二年待たされたりと言へり。週ごと火曜日に氣功道場の歸路辯護士先生の住居ありし恵比壽へ車にて送り届けしのうち、白金臺の自宅へ歸りき。そのうち、ゴルフ場に誘はれ、最低月に二度は同行したり。女流辯護士先生曰く「この老練の大辯護士先生の遊び方は豪快にて、さは承知あらせたまへ」と言はれき。まづは春と夏にゴルフ合宿なるものに誘はる。おほかた二泊三日にて、例へば加賀能登の片山津、信濃の諏訪湖・霧ヶ峰、八ヶ岳等大先生の會員なるゴルフクラブ。初めは北陸の小松空港近くの片山津俱樂部なりき。一日の料金は三萬五千圓。當然新幹線もしくは航空機を使ひ小松まで行く。一日目、女三名は勤務ありて、當日新幹線にて米原經由にて、北陸本線にて小松へ。ゴルフ後、夜は金澤隨一の料亭へ。ここにては大先生の招待なりき。翌日も片山津にてプレー後、勸進帳の舞臺となりし海に突きいでし料亭にて再び美食。そこも大先生持ち。やがて小松空港より最終便にて歸路東京へと向かへど、二日に十

五萬圓の出費。大先生には「次は亞米利加へご一諸せむ。午前中はスキー、午後はゴルフ、夜は葡萄酒庫。これに飽かばラスベガスへ行くなり」とのたまふ。當然航空機はエコノミーには非ず、百萬圓の旅行かくため息いでき。當時は現役にて、日程を檢するも供奉する能はず。大先生は食通にて旨きものには絲目をつけず。氣功教室のあとの食事は「居酒屋ならで、きよげの旨き食堂にて食はんとぞ思ふ」と言はれたり。ゴルフ場へ向かふ時は最年少の我運轉手を引き受けねばならず、大先生は日ごろより恐縮し時あつてか、高級壽司あるいは料亭にて接待したまふ。ある日、日本橋三越本店近くのステーキ家へ案内せられき。まづは看板を掲げず。入り口に赤き絨毯の引きたる、何の店か分からぬ所へ入るとカウンター席のみにて、「おやぢさん」と言はるる人物「先生いつものかな」と聲を掛く。まづはシャンパン出きたり。次に大なる霜降りの冷凍肉の固まりジヨリジヨリと音たて超薄切りのサシミにて皿に置かれき。食ひしためしのなき食感。最後にやうやう百七十グラムのフィレ出きたり。同行したる友人「夫一度この店に招待せられたためしあり、坐したるのみにて五萬圓なり」と耳元にてささやく。うゝん！ある日ゴルフ仲間と更なる飛距離望まんとゴルフクラブを買ひ替へむと談義中、大先生會話に介入し、「そのクラブ我に拂はせたまへ。」とのたまふ。「ゆゆしき儀なれば、無作法なれど拜辭するの外なし」「されど、日ごろ運轉擔當せらるる事、加へて、ガソリン代も高速代も負擔せずば、ともかくも我が支拂はんを許されよかし」と強く懇願せられ、全揃へならず、三萬圓のフェアウェイ・ウッド一本ばかり賜はらん、といふ事に決着せり。ドライバーは九萬圓、アイアン六本は十一萬圓なれば、これにて勘辨ならむか。その後、この大先生數回癌の手術せられて、體力減退したまふにも關わらず最低月一度はゴルフ場へご一諸に赴きたり。残念ながら數年前に逝去せられ、ゴルフ友達また一人減りたりけり。

(令和三年七月二十八日受附)